
最強聖母伝説

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強聖母伝説

【Nコード】

N3708W

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

魔物が網羅する暗黒時代。親を亡くした子供や、捨てられた子供たちが、世界にはたくさんいた。たくさんの子供たちが犠牲になる世界で、子供大好き！！なおっとり天然美少女が孤児院を創立。孤児院は、気づかぬうちにヒロインの為の組織になってました。彼女を盲目的に愛する子供たちと、ヒロインを狙う美形パトロンどもの攻防戦がメインのお目汚し作品。

設定（前書き）

彼女を盲目的に敬愛する子供たちと、ヒロインを狙う美形パトロン
どもの攻防戦がメインのお目汚し作品。

設定

主な登場人物

マリア＝ウィルヘルム（18）

ヒロイン。ウィルヘルム公爵家の次女。子供たちが犠牲になる世界に嘆いて、孤児院を創立。マザーに相應しい清廉で慈愛に溢れた美しい少女。

蜂蜜色の髪に、アメジストの瞳。

カイル（13）

マリアに最初に拾われた少年。母は娼婦で、父は不明。天才的な頭脳を持った、マリア至上主義なヤンデレ予備軍。彼女の教育の末、右腕的存在となり、孤児院を共に切り盛りする。マリアの前でだけ甘えん坊な好青年。本来の性格は冷酷。

艶やかな黒髪に、赤い瞳。

エリザベス（１３）

幼い頃に両親を魔物に食い殺され、身寄りがなかったため奴隷として売り飛ばされる。マリアに救われ、彼女を聖母のごとく崇拜する。マリアと並ぶと、彼女が姉と認識されるほど成熟した美貌を持つ。彼女と一緒に子供たちの世話をする。

まっすぐな銀髪、マリアとお揃いのアメジストの瞳。

ジーク（１０）

とある国の皇子だったが、クーデターにより身分を剥奪。処刑前になんとか逃亡。幼い頃から異母弟派の勢力により、死ぬか生きるかの人生だった。そのため感情表現が乏しい。マリアの前でだけ素直な少年。彼女以外には無関心。

金髪碧眼の絵にかいたような王子様。

デヴィット（１８）

マリアと同年。その美貌を利用して身売りをする孤児であったが、彼女に救い上げてもらい、その母性に惚れ込んだ。以後、マリアへの想いが溢れて忠実な騎士となる。ヒロインのためなら何でもする忠犬ぶり。

燃えるような赤髪に、黒曜石の瞳。

ナタリア王妃（48）

マリアの叔母であり、現国王の妃。貴族ではあり得ないほど心優しいマリアを、娘のように可愛がる。マリアの孤児院のパトロンとして、彼女を経済的に援助。実はひそかに息子の嫁、次期王妃にしようとして計画中。

波打つブロンドに、サファイアのような蒼い瞳。

キャラクターは随時更新

設定（後書き）

よろしくお願いします

はちみつ色の午後（前書き）

しばらくは幼少編です。

はちみつ色の午後

わたしの名前はマリア＝ウィルヘルム。

公爵家の次女として、このザイル王国に生まれました。
優しい両親と、かっこいいお兄さま。それにとってもキレイなお姉さまは、わたしの自慢なのよ。

そうそう。わたしはまだ10歳だけれど、公爵家のレディとして、どこに出ても恥ずかしくないよう勉強しているの。

ダンスや言葉使い、礼儀作法やマナー、歩き方から笑いかたまで！

とっても厳しかったけれど、頑張ったわ。だって家族に恥をかかせたくないものね。

それから今はね、社会というものを勉強しているのよ。これが、すつごく楽しいの。だって、外の世界が知れるんですもの！

わたしは公爵家の娘だから、外には出してもらえない。だから、街の人がどんな暮らしをしているか知らないの。あまり知る必要はないとお父さまは言うけれど、わたしはそれをおかしいと思う。

だって、貴族の給料は、国税によって払われていると先生がおっしゃっていたわ。

なら、もっと民について勉強しても良いんじゃないかしら……。

コンコンッ

「マリア様、スタンリイです。入ってもよろしいですか？」

「スタンリイ？ええ、どうぞ」

書きはじめた日記を静かに閉じて、鍵つきの引き出しになおす。
振り向くと、スタンリイはマリアに礼をした。

「こんにちは、マリア様」
「こんにちは、スタンリイ！ねえ、今日はなんのお話をしてくださるの？」

彼が、話題に上がった社会の先生である。
午後は彼の講義を、お茶をしながら聞く。
今のマリアにとって、大好きな時間だった。

はちみつ色の午後（後書き）

続きます

ゆめみたいにしあわせだった（前書き）

今回は兄と姉が登場。

ゆめみたいにしあわせだった

今回の講義で、わたしは自分の無知を痛感しました……。

「お兄さま、お姉さま」

「どうしたんだい？ そんなに暗い顔をして」

「そうよ、マリア。お食事中にそんな顔をしてはいけません」

「だって、本当に悲しいのよ……」

兄さまは、おや？と首をかしげた。

「今日は、マリアの大好きな社会の講義じゃないか」

「もしかしてスタンリー先生に怒られたの？」

姉さまは心配そうにこちらを見る。わたしはそれに、力なく首をふった。

「ううん。違うのよ。今日ね、魔物についてお話していただいたの」

ああ、と呟いて、兄さまも暗い表情になった。

「僕も小さい頃に習ったなあ。確かに楽しい内容じゃないね」

「あれでしょう？ここ10年で、魔物が急増しているという……」

おそろしいわよね、と姉さまがわたしの頭を優しく撫でた。

「今世界では、たくさんの人々が食い殺されていると聞きました。それによって両親をなくし、路頭に迷う子供たちで街は溢れていると……」

わたしは、今まで、なにも知らなかったの。

毎日毎日、

広いお屋敷にいて

メイドに朝の支度をしてもらって

美味しい食事をして

淑女としての勉強をして

キレイなドレスを着て

ティータイムをする

「世界は優しくて美しいのだと、信じて疑わなかったの」

だから当然、世界中の子供たちも、わたしと同じだと思っていた。

子供は大人に守られるものだ。でも違ったのだ。

大人たちは魔物と戦い、散っていく。魔物と、そんな大人たちへの対応で、国は手一杯なのだ。残された子供たちへの対応にまで手が届かない。となると、見捨てられた子供たちは路頭に迷い、ひとりで生きていかねばならない。

それが、マリアの知らなかった、マリアの時代の常識だった。

「マリア、我々には貴族としての生活がある。残念だけれど、僕たちには世間の状況を変えることはできないんだ」

「そうよ。私たち貴族の娘が、民のためにできることは、少しでも国にとって有益となる結婚をすることです」

「そう、なのでしょうが…」

わたしと同じような子供たちが、今この瞬間、どこかで泣いている。

わたしにも、全ての子供たちを救うなんて、不可能だとわかってるの。

でも、わが領地の民ぐらいは救いたい。

わたしは公爵家の娘。

地位と名誉と財力がある。しかし、今の偏った知識だけでは誰も救えない。もっと民の生活に実用的な知識を学ばなければ……

「わたし、もっともつと学びます。それから、わたしが民のために何ができるか考えます」

もちろん、有益な婚姻関係が「国」のためになることは分かっています。

しかし、それによって「民」の生活が変わることはあまりありません。

「もっと直接的に、民の役に立ちたいの。世界が、とても悲しいことを知ってしまったら、もう知らないふりはできないから」

「マリア……お前は変わってるね」

お兄さまは、困った令嬢だと言って、苦笑した。

「マリアの好きなようにしなさい」

お姉さまは私を抱きしめた。

この温もりを、たくさんの子供たちに知ってほしい。

ゆめみたいにしあわせだった（後書き）

まだまだ続きます、

世界は小さく呼吸する（前書き）

しんどいな……いちページ……

世界は小さく呼吸する

あれから4年。わたしは12歳になりました。
そしてたくさん勉強したの。

淑女としての教養、読み書きや音楽にダンス。
それ以外に経済学や経営学、植物学や歴史まで。
でも数学は苦手で、計算ぐらいしか出来ないの。

他にもたくさん勉強したけど、実はね？一番楽しかったのは民衆の
生活なの！

まず、自分のことは自分で出来るようになったんだから。
朝は自分で起きてカーテンを開けて、顔を洗って髪を整えるの。
それぐらい……って思われるかもしれないけどね、私たち貴族の娘に
とっては、メイドにしてもらうことが当たり前なのよ。わたしも、
最初は大変だったわ。

出来るようになってからは、たまにしかしないようにしてるの。メ
イドたちのお仕事が無くなってしまうもの。

あとね、お料理もマスターしたのよ。うちのコックにお願いして、
宮殿料理から家庭料理まで教えて頂いたの。包丁も火も使ったこと
がないけど、もともと料理の才能があつたのかもしれないわ。今で

はコックも唸るほどの腕よ。アップルパイはコック以上だと家族にも大好評

それから毎日、ティータイムのスイーツは自分で作ってるわ。

最後に、メイド長のマーサに頼んで家事を教えてもらったの。掃除、洗濯、皿洗いに庭そうじ、床磨きまで。

わたし、メイドたちを尊敬したわ。だって、あんなに重労働で、はつきり言って汚れ仕事だとは知らなかった…

でもね、どんなに手がボロボロになっても、諦めなかったわ。今では次期メイド長と言われるほどの実力よ。

マーサも「あなたは町娘以上の根性です。公爵令嬢として育ちながら…町娘でさえ悲鳴をあげる仕事量でしたのに…ちっ」と、言ってくれたわ。

ふふっ。彼女が認めてくださったということだわ。ありがとう、と笑顔で伝えれば、彼女は悔しそうに去って行った。…なぜかしら？

こうして、淑女としての教養も男性としての知識も、一般女性としての生活力も身につけた。

あとは、外で実際に見て学ばなければならない。

わたしはこの4年間で、新たな目標ができたの。

今までの知識が役立つ素晴らしいアイデアだと思うわ。でも本当に、それでわが領地の子供たちを救えるのかわからない。それを確かめるためには、外に出なくちゃ。

もう12歳。そろそろ町に出歩いてもいい時よね？

自分の立場はわかっているの、もちろん、お忍びでだけど…

パタン、と日記を閉じて、後ろに控えていた騎士たちへ向き直る。

「領地を見て回りたいの。護衛、してくれるかしら？」

世界は小さく呼吸する（後書き）

動き出します。

暗い道のむじつがわ（前書き）

やっとキャラ登場。

暗い道のむこうがわ

今日は初めての町。

それに、お忍びで来てるんだから、口調も気にしないでいいわよね？
うふふつ。護衛の騎士たちは普段着で気づかれないように少しだけ
離れて護衛してくれてるの。

わたしも町娘が着るような、質素なドレスを着たから大丈夫……、

「あら？ここはどこかしら？」

後ろを振り返っても誰もいない。

「うーん…なんだか暗いわね」

どうやら、カルシューガ（豚肉とチーズのミルフィーユをレタスで
巻いた軽食）に夢中で、人気のないところへ来てしまったようだ。
食べながら歩くななんて初めてだから、つい気が緩んだのだろう。

裏路地は危険だと習った。それに、この裏路地には人ひとりいない。

「早く戻らないと……」

ガッシャーン！！

「きゃあっ」

突然の物音に、思わず持っていたカルシューガをおとししまった。

「誰かいるの…？」

誰にも遭遇しないうちに、ここから出なければならぬ。だが、マリアは何故か、あの音のもとに行かなくてはならないと思った。

裏路地をさらに奥へと進む。左右の分かれ道になっていた。右の路地をちらつと見ると、そこには……

「そんな…っ」

ボロボロの少年が、うつ伏せで倒れていた。急いで駆け寄り少年のそばに膝をつく。

ゆっくりと体を仰向けにすると、全身に打撲のあとがあった。

「ひどいケガ、…」

少年の顔にかかった赤い髪を、そっとすいてやる。あらわれた顔も痛々しかった。

酷く殴られたのだろう。顔は腫れ上がって、頭や口からは血が出ていた。

「ねえ、ねえ、わたしの声が聞こえる？」

晴れ上がって血だらけの顔を、やさしく両手で包み込んだ。初めて血生臭い現場に遭遇したが、マリアはあまり気にならなかった。

「…ん…」

うつすらと、少年が目を開けた。

「良かった。死んでないわよね？うん。あのね、わたしは今から誰かの助けを呼んでくるから、君は絶対にここから動いちゃダメよ？あ、そうだ…」

マリアはいそいそと、カバンから水の入った水筒を出して、ハンカチを濡らした。それをしばって、少年の顔を優しく撫でるように拭いてやる。

「あ…」

少年は（ケガのせいで表情はあまり分らないが）うつとりと目を閉じた。可愛らしい反応に、マリアはこんな状況にも関わらず、クスクスと笑ってしまった。屈託なく笑うマリアを、少年はじっと見つめている。

「さあ、キレイになったわよ」

じつとこちらを見つめる少年に、ふわりと笑いかける。

「それじゃあ、ここで待っててね？絶対よ？」

「っ、…！」

少年は弱々しい力で、必死にマリアのスカートを握った。まるで母親に置いていかれまいと、必死に縋る子供のように。

そんな少年を安心させるように、マリアは優しく笑いかけた。

「大丈夫、かならず迎えにくるから。あなたを助けにくるから」

縋る少年の手をほどいて、ギュツと握りしめた。そして泥と血で汚れたその手のひらに、羽のような優しいキスをした。

「大丈夫よ」

不安、孤独、期待、歓喜、そんな目を向ける少年にもう一度笑いかけて、マリアはその場をあとにした。

暗い道のむじつがわ（後書き）

やっと登場…？

寄り添うことは癒すもある（前書から）

デヴァイットside

寄り添うには遠すぎる

生きるためには、身売るしかなかった。
別にそれが不幸だとも幸せだとも思わない。

親のいない無力な子供にできることといったら、それしかないからだ。このスラム街に生きる学のない子供たちにとっては、当たり前前の現実だった。

でも、ひとつ幸いだと思うのは、この顔だ。

美形だと女によく言われる。

もし不細工に生まれてたら、客は選べないし、金にならないやつらに抱かれるだけだからな。

この美貌を使って可愛くお願いすれば、貴族のアホな女どもは喜んで俺を買う。

美少年を翻弄している快感が堪らないらしいな。

俺には理解できない。

こんな汚らしい行為のどこが楽しいのか。

それが生きるための唯一の手段だからやってるだけだ。

じゃなきゃ、やってない。こんなこと。利点があるからしてるんだ。

けど、今日は最高にツイてなかった。

俺を気に入って何度も屋敷に招く、貴族の婦人がいた。はつきりいつていい年した色欲ババアだ。そいつがいたく俺を気に入って、困おうとか言い出した。まったく冗談じゃない。

親も庇護も家も財産もないんだ。

こんな荒んだ生活で、せめて自由だけは奪われなくなかった。だから拒絶した。すると身のほど知らずと罵られ、部下を使って俺に制裁をくわえた。

そしてご丁寧にも、ボロボロの俺の体を人気のない路地裏に連れ、打ち捨てて去っていった。ガシャン！！と大きな音を立てながら倒れる。血は酷いし、今のでたくさんアザが出来ただろう。

「ああ……」

なぜ生まれたのだろう。
なぜ生きるのだろう。

こんな人生を定め、こんなどうでもいい人間を生み出した神の気が知れない。そんなことを考えながら、俺はゆっくりと意識を手放した。

「ねえ、ねえ、わたしの声が聞こえる？」

ふと、柔らかな声が俺の意識を引き上げた。
誰かが俺の頬を、やさしく両手で包み込む。

なんて柔らかくて、あたたかいだろう。

「…ん…」

うつすらと、腫れあがった目を開けてみた。
すると目の前には……

「良かった。死んでないわよね？」

とてもうつくしい少女がいた。まるで春のような、あたたかい笑顔を浮かべる少女。

彼女は女性なのに、デヴィットが知る女のように汚らわしくなかった。清廉なひとだった。

「うん。あのね、わたしは今から誰かの助けを呼んでくるから、

君は絶対にここから動いちゃダメよ？あ、そ うだ…」

こんな薄汚いストリートチルドレンなんか、放っておけばいいのに。彼女はいそいそと、カバンから水の入った水筒を取り出して、ハンカチを濡らした。それで俺の顔を優しく撫でるように拭いてくれる。

「あ…」

今まで一人で生きてきた。

だからこんな、優しい触れ合いなんか、しらない。

無意識にうつとりと目を閉じる。夢のように幸せだった。

すると少女がクスクスと笑う。目を開けて少女を見る。

すぐく、すぐく無邪気に笑っていた。見ているこちらまで、やさしくなれるような、あたたかくて美しい笑みだった。

こんな状況なのに、今の俺には、彼女の全てが特別だったのだ。彼女の全てをこの目に納めたいと思った。

「さあ、キレイになったわよ」

ふわりと俺に笑いかける彼女は、まるで遠い記憶にしかない母よりも、母のようだと思った。俺よりも幼い顔立ちの少女の、全てを包み込むようなオーラのせいだ。

「それじゃあ、ここで待っててね？絶対よ？」

「っ、…！」

この存在を、失うわけにはいかないと思った。
今離れれば、一生会えないのではないのかと。

ふと、実の母が、俺をこの場所に捨てた日の光景が浮かんだ。

そして、あの時には感じられなかった絶望が、俺の胸を締め付けた。
だから必死に少女のスカートを握る。まるで、母親に置いていかれ
まいと、必死に縋る子供のように。

そんな俺を安心させるように、少女は優しく笑いかけた。

「大丈夫、かならず迎えにくるから。かならず助けにくるから」

縋る手を優しくほどいて、少女はギュッと握りしめた。

そして泥と血で汚れたその手のひらに、羽のような、優しいキスを
してくれた。

「大丈夫よ」

彼女の神秘的な紫の瞳に、希望を見た。
でも怖い、信じたいのに。

だって、こんなにもうつしくて、あたたかい人知らないから……

もしもこんな俺が、そばにいたいと言えば、彼女は拒絶するだろうか。

寄り添うには遠すぎる(後書き)

次もデヴィット

マリア、
な話。

どこにもない、ここにしかない（前書き）

Debuttside

どこにもない、ここにしかない

柔らかくて、甘い香りがする。

デヴィットは、ゆっくりと目をあけた。

あたりを見渡してみる。白を基調とした、あたたかい配色の装飾品が目に入った。どうやら、貴族の屋敷のようだ。

しかし華美すぎない、今まで買われたどの貴族の女たちよりも、センスのいい部屋だった。

「あの子は…」

もしかしたら、最後に見たあの少女の家かもしれない。

彼女が消えてから、すぐに意識を手放してしまったから、推測ではないが……

助けに、戻ってくれたのだろうか？

こんな、薄汚れた俺を、助けに。

「会い、たい、」

もう一度、彼女に触れたい。

記憶に残る彼女は、とてもあたたかくて、清廉なひとだった。

あの優しい手を、今でも覚えてる。忘れられる筈がないんだ。

生まれて初めて、美しいものに触れたのだから。

ガチャ
…

「！！」

はじかれるように扉に目を向ける。

ゆっくりと、重厚な作りの扉が開かれた。

そして現れたのは、

「あ、起きたのね？」

ふんわりと笑う、あの美しい少女だった。

慌てて上体を起こす。

「っ、ここまで俺を…」

「ええ、あのあとうちの騎士を連れてきて、あなたを運んでもらったの」

助けてくれたのだ。本当に。

俺をあそこに捨てて行った母とは違う。

ちゃんと迎えに来てくれた……彼女は、おれを、

「えっ、ど、どうしたの？どこか痛いの？」

「……？」

「あなた、泣いてるわよ？」

「！」

あわてて頬に触れると、たしかに濡れていた。

「な、なぜ……」

彼女にまた会えた。

彼女は俺を迎えに来て助けてくれた。

嬉しいはずなのに、なぜ……

ごしごしと、乱暴に目をこすつていると、彼女は優しく俺の手を掴んだ。

「ダメよ。そんなに乱暴にこすつちゃ。それに、無理に泣き止まなくていいよ」

泣きたいだけ泣いて、と彼女は笑った。そしてベットに座ってはらはらとなき続ける俺を、優しく抱きしめた。

「っ、」

甘い香りがした。彼女の腕の中は、切なくなるほど甘美だった。

「泣いていいよ。大丈夫、大丈夫だから…」

情ない姿しか、見せていない。なのに彼女は、変わらず微笑みかけてくれるから。

「ごめつ、」

出会ったばかりのあなたに縋って。
あなたの優しさにつけこんで。
美しいあなたに触れて。

それでも

「見つけてくれて、ありがとう…！」

全てに感謝せずにはられない。

「これも何かの縁よね。だから、好きなだけここにいていいのよ」

彼女は俺を抱きしめていた腕をそつと離して、今度はふわふわと微笑みながら俺の頭を撫でた。そのお陰か、少し気持ちが落ち着く。

涙をぬぐって、彼女のアメジストの瞳を見つめた。

「俺は…あなたのそばがいい」

「ふふっ、ありがとう。そうね、じゃあ、うちの使用人として…、」

「ずっとそばにいたい」

「？、ずっと？」

「そう、ずっと。永遠に。使用人になれば、一生あなたのそばにいられるのか？」

「一生だなんて…気を使わなくていいのよ？そんなつもりで助けたわけじゃないから」

「違う」

もう、恩とかの問題じゃない。

あなたのぬくもりに触れたから、俺は……、
あなたなしでは生きられなくなってしまった。

「うーん…そうねえ。一生共にいるといえは、私の専属騎士かしら？でも、死ぬまで私のもの、ってなってしまうわよ？」

それだ、と思った。

「ならせてくれ。あなただけの騎士に」

俺は学もないし、卑しい身分だが…それでも、

「そのための努力は惜しまない」

あなたのそばにいる理由が欲しい。
決して揺るがない理由が。

それに騎士になれば、彼女のそばで、一生彼女を守れるのだ。

使用人になってしまえば、恐らく貴族であろう彼女が嫁いでしまう
とき、俺は置いていかれるのだろう。

かといって、彼女の伴侶になり生涯を共にするなんて、孤児の俺が
願うのはおこがましい。

優しく清廉な彼女を手に入れるなんて…そんな高望みはしない。
望みは、ただひとつ。

「騎士団に入ると、とても厳しい訓練があるのよ？」

ただ、あなたのそばにいたいんだ。

それ以外に気にするものなんてない。だから、

「関係ない」

興味なさげに返せば、彼女はへにやりと眉を下げて苦笑した。

「そうね、それがあなたの望みなら、いいわ。でも、本当に辛くな
ったらいつでも言ってね？あなたは自由なの。縛るつもりで助けた
んじゃないから」

「わかってる」

本当は縛り付けてほしい。この心臓がいつか沈黙するその時まで、彼女のそばにいたいんだから。

でも、優しい彼女はしないだろう。

「騎士団の入団試験は半年後にあるわ。それまでうちで勉強しよう。うちの騎士たちに稽古をつけてもらうの。どう？」

につこりと彼女が提案してくれた。

「だが、生活費がかかる。迷惑ではないのか…？」

「あら、微々たるものよ。それに、私の騎士になってくれるのじゃない？」

「ああ」

彼女の騎士になる。なんて甘美な響きか。

「俺の全ては、あなたのものだ。騎士になれば、必ずあなたの役に立ってみせる。そしてこれは、俺の心からの望みなんだ。だから、素直に受け入れて欲しい。」

否定しないでほしい。また俺は、生きる意味を失ってしまうから。

「…わかったわ。ねえ、今さらだけど、名前は？」

「デヴィットだ」

「デヴィット…素敵な名前ね！わたしはマリアよ」

「マリア…」

「ええ」

ふんわりと笑う、美しいひと。

「マリア、本当にありがとう」

生きる意味を与えてくれた。

「ふふ。わたしも。素敵なナイトを見つけたんだもの。神に感謝しなくちゃ」

「……ああ、そうだな」

神などいない。俺は知っている。
だって、一度も救ってくれやしなかった。

俺を救い上げてくれたのは、

「感謝しても、しきれないだろう」

君だよ、マリア。わたしの女神
…。

どこにもない、ここにしかない（後書き）

無口クールな盲信的騎士かもしれない。

それに、お気に入り件数がすごいことになった。ありがとうございます。
います。こんな作品ですが、よろしくお願いします！

君が見つめる先にあるもの（前書き）

デヴィットが騎士団に入るまでのお話。

君が見つめる先にあるもの

運命的な出会いから、半年が経った。

あれから俺は、彼女の騎士になるための訓練と講義を欠かさず行い、必死になって身に付けた。

しかし、それ以外の自由時間は全て、マリアのそばで過ごした。彼女の纏う空気が、そうさせるのだろう。

知れば知るほど、魅力的なひとだった。どこまでもあたたかくて、美しい。

同時に、果てなく人を惹き付け、依存させる危うさすらある。

俺にとってのマリアは、まさに後者だった。

半年前のあの日、ぼろぼろになって打ち捨てられていた俺を救い上げてくれたマリア。

それだけでなく、見返りもなしに屋敷に住まわせ、孤児である俺の愚直なまでの願いすら叶えた。

「貴女の騎士になりたい ……」

彼女はただ、嬉しそうに頷いてくれた。

それから彼女のもとで暮らす毎日が幸福だった。

「デヴィット」

優しく俺を呼ぶ甘い声は何よりも好きになった。
どんな命令をされようとも、俺は喜んで受け入れるだろう。

「あら、おはようデヴィット」

朝日を浴びた蕩けるようなハチミツ色の髪は、息をのむほど美しい。
やはり彼女はわたしの女神なのだと、改めて思ってしまった。

「ふふっ わたしはただの公爵令嬢じゃないのよ？」

貴族なのに飾らない、素晴らしいひとでもあった。
自分の出来ることはなんでもしていた。

ますます彼女を守りたくなった。
些細なことでもいい、彼女の助けになりたい。

「さあ食べて、デヴィット。こう見えても、料理は得意なの」

生まれて初めて、家庭的な料理というものを食べた。
幼い頃母に捨てられた俺は、ゴミを漁るか、買われた貴族の女の家
で冷たい料理を食べるかだったから。

「まあ、泣かないでデヴィット……」

彼女の手料理はあたたかくて、とても美味しかった。
帰る場所があつて、笑い合える愛しいひとがいて、あたたかいご飯
がある。

こんな些細な幸せが、ずっと欲しかった。

「ありがとう…マリア…」

半年前のあの日から、全てに感謝せずにはいられない。
この世に生まれ、孤児となり惨めに生きてきた。

だが、全ては君と出逢うためだった。
そう思えるほど、俺はマリアに依存していた。

「もう、半年なのね…」

白魚のような美しい手が、そつと俺の頬に触れる。
出会ってからたった半年で、俺の背は軽々とマリア包み込めるほど
成長した。

そしてマリアは、どんどん美しくなった。

「ねえデヴィット、もし騎士団が辛かったら、」

「マリア」

俺を救い、生きる意味すら与えてくれたこの愛しい手を守るためなら、俺はいかなる努力も惜しまない。

「君の騎士になるためなら、どんな試練でも耐えられるさ」

俺が生きるために身売りをしていた過去を、彼女は受け入れてくれた。

こんな汚れた俺に、躊躇いなく触れてくれた。

だから、

「待っててくれ。騎士団で誰よりも素晴らしい騎士になって帰ってくる」

君にふさわしい騎士になりたい。

「それから、君の夢を手伝わせて欲しい」

君は話してくれた。いつか孤児院を作りたいと。小さい頃からの夢だったと。

2ヶ月前。

「わたし、子供たちを救いたいのに」

突然だった。訓練が終わって、マリアと二人でランチをしている時だ。

俺が愛してやまないアメジストの瞳が、不安気に揺れている。マリアは尋ねた。

俺のような孤児は、街に溢れているの？と。

もちろんだと答えた。令嬢であるマリアは、辛い現実を知った。しかしそれでも、挫けなかった。

「わたし、孤児院を作るのが夢なの。子供たちを救いたい。そのために、この地位を手放したとしても。だからデヴィット…」

そして次に放った言葉は、いま、思い出すのも辛い。

「わたしの騎士にはならないほうが良いわ」

捨てられる、と思った。

「っ！……いやだ。俺は、……君の騎士になりたい！君以外じゃ意味がないんだ！」

なにもかも。生まれてきた意味すら、君の騎士になるためだと……なの……！

「でも先生が、あなたはとても優秀だと言っていたわ。貴族じゃない私に使えても、あなたの才能を無駄にしてしまうの……」

「君が令嬢でも王女でも平民でも関係ない！ああ、どうかお願いだ……マリア……」

「……なら、手伝ってくれる？私の夢を……孤児院を作りたいの」「ついていきます、マリア……あなただけに」

「俺のような孤児を救いたい」

なにより君のそばにいたい。

「ありがとう、デヴィット……騎士団での生活、頑張ってね」

ふわりと笑う君を、刻み込みように見つめる。

「マリア、手紙を書いてもいいか？」

この笑顔を2年も見れないなんて…

「ふふつ。もちろんよ。わたしも書いても？」

「ああ、きつとそれだけで頑張れる気がする」

「冗談ではなく。」

「じゃあ、たくさん書きます。怪我しないでね？」

「マリアも、無理はしないでくれ」

ふわりとした甘い容姿に似合わず、破天荒なところがあるから心配でたまらない。

「……いつてらっしゃい」

君と離れたくない。

だけど、君のそばにいたいから。

「ありがとう、マリア。必ず立派な騎士になって帰る」

そして君のそばで、君の夢を手伝おう。

その年、王立騎士団には伝説が生まれた。

新人騎士のなかに、赤き鬼神がいる、と。

鬼のように強い、赤髪の美しい男だった。
そんな彼の口癖は決まって、

「我が女神に誓って、」らしい。

君が見つめる先にあるもの（後書き）

騎士団時代のデヴィットも、また番外編で書きます。

寂しいだなんて傲慢ね（前書き）

叔母であり王妃様の登場。

寂しいだなんて傲慢ね

わたしの可愛いマリア。

ただの姪ではない、実の娘のように愛しい子。

「貴女も、もう16になったのね…」

久々に会ったマリアは、とても美しくなっていた。

意思の強さが、彼女の瞳をきらきらと輝かせている。

「はい、王妃さま。私もついに成人しました」

「あらあら王妃様だなんて……。小さい頃のように呼びなさいな、マリア」

イタズラっぽく言えば、マリアは嬉しそうに笑った。

「ふふっ…ありがとうございます、アメリカ叔母様」

マリアの髪を、優しく撫でる。

姉さんにそっくりな、とろけるようなはちみつ色の髪。

アメジストの瞳は、義兄に似たのだろう。

16になったマリアは、幼い愛らしさを残しつつ息を呑むほどの美少女へと成長した。

わたしが愛して、いや、誰もが愛しいと思えるその美しい心は、失わずに。

「マリア、今日貴女を王宮に呼んだのは、成人を祝うだけではないの」

「まあ…わたしなにかしてしまいましたか？」

「いいえ、愛しいマリア。わたしは聞きたいだけよ」

「なにをです？」

きよとりとわたしの言葉を待つマリアの両手を、ぎゅっと包み込む。

「マリア……」

「は、はい」

「お慕いしている殿方はいないのでですか？」

「！？」

「あら。何も驚くことではないわ。もう16ですもの、そろそろ婚約ぐらいはしないと」

「こ、婚約……」

マリアは少し悩んだあと、わたしを真っ直ぐと見据えた。何かを決意したような強い瞳だった。

「叔母様、わたしには目標があるのです。夢なんて言葉で終わらせたくないほどの」

「なんです、それは」

小さい頃から貴族らしくない子だった。

思いやりがあつて、身分など気にしない優しい子。

ふわふわとした容姿に似合わない奇抜な行動は、いつだって周囲を仰天させた。

なんでも、8歳の頃には宮廷料理から市民の家庭料理まで習得し、メイド顔負けの家事能力を身に付けたいらしい。

それに、マリアが拾った孤児の男……

今や騎士団で知らぬ者などいないだろう。

赤き鬼神と呼ばれる美貌の騎士。

マリアを絶対的な主としているらしい。

というのも、うちの騎士団長や総帥が必死になって国家騎士団に入れようとしているのだが、全くなびかないのだ。

恐ろしく人を惹き付け魅力してやまないマリア。いったい、どんな目標を持ったのだろう。

「わたし……」

「我が領地に、孤児院を作りたいの」

「……孤児院？」

「はい。世界は今、暗黒時代を迎えています。魔物たちが闊歩して……」

「ええ、そうね。どの国も戦争などする暇がないほど、騎士団は魔物退治にあてがわれているわ」

「そして、どんなにたくさんの騎士たちを動員しても、毎日のように人は死んで行く……」

アメジストの瞳が悲しげに揺れ、長い睫毛が影を作る。

「大人には、魔物退治のための保障や報酬があります。でも、こんな時代です。無力な子供たちだって、たくさん犠牲になっているわでも、たくさんの子供たちが路頭に迷っているのです」

「孤児……確かに国は、魔物討伐をする大人たちにしか手が回っていない状況ね」

「はい。だから、せめて我が領地の子供たちくらいは、領主の娘である私が守ってあげたいの」

「それがマリアの夢なのね」

「きっかけは、社会の講義だったわ。わたしはどんなに自分の知識が浅いか自覚しました」

「いいえ、マリア。たとえ知ったとしても、普通はそこまで行動し

ないわ。普通の令嬢は、ね」

間違いない。貴女ぐらいなものよ。

たいていの人間は、その現実には同情して終わるのに。

「8歳の時に、孤児院を作りたいと思ったの。わたしが子供達のマザーになって、愛情や生きるすべてを教えてあげよう、って。だからたくさん勉強したの」

ふわりと笑うマリア。とても幸せそうに語っていた。

「だからってメイドの真似事まで……」

「家事や料理は、子供達のためにしてあげたいの。令嬢としてのプライドは捨てなくちゃ」

「まったく、貴女って子は……孤児院を作りたいといっても、わざわざ貴女が孤児院を経営しなくてもいいじゃない。誰かを雇って、あなたは慈善事業としてパトロンになればいいわ」

それでは駄目なのかと聞けば、マリオははっきりと答えた。

「確かに、それでも十分に子供達は救われるわ。だからこれは私の自己満足なのよ、アメリカ叔母さま。私は……自分にできることならなんでもしたいの」

つまりマリア、貴女は　　。

「そのためなら、公爵令嬢としての地位も捨てます」

「マリア……夢を見るのは結構です。しかし、貴族の娘としてあなたには国益となる婚姻を結ぶ義務があるのよ？」

優しいがゆえに甘いところがある。

しかし次の言葉を聞いて、わたしは感心せざるを得なかった。

「それでも、私は自分の手で子供達を育てていきたい。それが、国益になると信じているからです」

「救えるのはほんの一握りの子供たちだけよ。貴女の姉は先日、隣国の第二王子との婚約がきまつたでしょう？そのお陰で、我が国はたくさん利益が生まれたのよ」

「わかっています。でもそれは、姉さんにしかできないことだわ。だって第二王子は、姉さんを愛したのですもの」

「……ともかく、わたしは反対よ。貴女のような地位も美貌も教養も兼ね備えたうえに性格までいい娘を結婚させないなんて…、国の損失だわ」

「家族はみんな理解してくださいましたわ、アメリカ叔母さま」

「わたし今日は、貴女を息子の婚約者にしようと思っていたの」

「まあ！アイザック様とわたしが…」

「嫌かしら？」

「いいえ。でも、…わたしは今までたくさんの知識を得てきました。子供たちを教育するためです。寝床を与えて育てるだけじゃ、もったいないもの。」

「教育は階級のある血筋のみが受けれるのよ？だって市民が読み書

きや計算ができて、日常では必要ないもの。それに、やはり市民には難しすぎるんじゃない？勉強なんて」

「わたしたち貴族が、子供のころから教育を受けて役人や大臣になるのと、どう違うのですか？教育をきちんと受けた子供達には、たくさんの可能性があります。きっと貴族の血筋なんて関係なく、できる子是可以るの」

マリアの強い意志に、もうなんと言ったらいいいのか、分からなくなってしまうた。

「公爵令嬢が教師だなんて…、」

「機会と環境を与えられた子供達は、いずれこの国を背負う優秀な人材となります！それがわたしなりの、国への貢献なの。それに、ふふっ…子供が大好きだから」

うつとりと極上の笑みを浮かべるマリア。

「ハア……。デヴィットは知っているの？あなたが、公爵家の地位を捨ててまで…」

マリアの専属騎士になれなくとも、あの實力ならば、デヴィットはどこからも引つ張りだこなのだ。いくらマリアに拾われ、マリア至上主義だとしても、もしかしたら……

「デヴィットは知っています。それでも、私がただの娘になってもいいって、夢を手伝いたいって言うてくれたの」

「（彼の女神信仰説は、間違いないのね…）いいわ。とりあえずやってみなさいな。でも、私はまだ諦めていません！貴女が20歳になったとき、もう一度うちの息子との婚約を考えていただきますからね！」

「まあ、ありがとうございますアメリカ叔母さま！許してくださいさるのね」

「とりあえずパトロンにはなってあげましょう。私も王妃として協力するわ。ただし、20歳になるまでに、貴女の言う教育とやらに成果がなければ打ち切るわよ」

そして時期王妃になっていたわ……。

寂しいだなんて傲慢ね（後書き）

すみません、途中で文が切れていました。修正いたしました。

泣けないから笑うのです（前書き）

カイル君の登場。

泣けないから笑うのです

母は娼婦だった。

こんな時代なら、別に珍しくもない。

豊かな金髪を持った美しい女性だ。

僕を産んだせいで、変わり果ててしまったが。

父親はわからない。別に、誰でもいいんだ。

問題なのは、僕だからね。

僕は生まれた時から異常だった。

父を愛していた母は、父親譲りの黒髪に喜んだのだろう。
だが、瞳は、人間ではあり得ない“深紅”だった。

鮮血のように不気味に光る赤。

母は、その日から狂い出した。

自分は魔物を産んだのだと発狂した。

そして、憎しみの全ては僕に向かった。

「このバケモノ……！」

バシ！バシイ！！

「……っ、」

「返して、返さないよ！わたしとあの人の子を返して！」

ドカッ

「っ！」

降り続ける暴力に、僕は黙って堪えるしかない。
僕は本当にバケモノなのだから。

なぜなら、この瞳のせいで母は狂い、僕たち親子は町の人からも冷たい視線を浴びている。

母を不幸にしたのは、間違いなく僕だった。

それでも母が僕を殺さないのは、この瞳以外のすべてが、愛する男に生き写しだからだろう。

憎いのにな愛しくて
殺したいのに殺せない。

「すみ、ませ、……母さん」

母の精神は、壊れかけていた。

僕が、解放してあげなければならない。
もう充分、生かしてもらった。13年間も。

いつか愛してもらえるのでは、なんて望んだことが愚かだったのだ。

こんなバケモノでも、母は殺せない。

僕が、愛した男に生き写しだから。

ならば、

「あんだなんかっ、生きてちゃいけないのよ！」

パシッ

殴ろうとしていた母の腕を掴んだ。

「な、なによ！離しなさい！」

生まれて初めて抵抗したからか、母は少し怯えていた。

「母さん……」

「あんたはわたしの子じゃない！母さんだなんて呼ばないでちょうだい！」

「…ああ、そうだね。僕はバケモノだもの。生まれたこと自体が罪深いんだ」

「な、なによっ、あんだ…なんで、」

「解放してあげるよ。もう、なにも望まないから」

「なん、で、いつも…」

「さようなら、母さん」

「なんでいつも笑ってるのよ!？」

変だよ。哀しいのに、泣き方がわからないんだ。

母の手をそつとおろして、僕は静かに家を出た。

泣けないから笑うのです（後書き）

ヤンデレ予備軍のカイル君。次は、マリアちゃんの登場です。……
更新遅くなりましたごめんなさい（；；；）

たおやかな侵蝕（前書き）

カイルは誰よりも疑い深いという設定。

たおやかな侵蝕

どれほど歩いただろうか。

足がもつれそうなほど重たくて、カイルはやっと歩みを止めた。町の中心部まで来たようだ。ぼうつと辺りを見渡す。

「なにも、ない……」

目の前には、たくさんの人が溢れているけれど、自分には、なにもなかった。

何もかも捨てて、この身ひとつで飛び出してきた。なのに、心は少しも軽くならない。

「ああ……これからどうしようか」

なんだか、生きること死ぬことも、面倒だし。

「誰か殺してくれないかな……」

とりあえず、近くのベンチに腰かけた。すると、忘れていた足の痛みを思い出す。

「……このまま、ここで寝よう」

もう、足も限界だった。

それに、こんなところで子供が野宿をしていれば、夜の町に忍び込んだ魔物たちが喰い殺してくれるかもしれない。

どきりとベンチに寝転がって、カイルは腕で顔を隠した。

もう、なにも見たくない。

でも、それだけでは町の喧騒までは消せなかった。

だから少しでも自分を隔離するために、丸まって寝てみた。すると、

「……ねえ、大丈夫？お腹がいたいのか？」

ひどく優しい女の声が、背後から聞こえた。

母のような金切り声でもなく、村の女たちのようなガミガミした声でもない。

「なんでしょうか？」

僕は、背を向けたまま答えた。

もしかしたら善人を装った人買いかもしれない。

「うずくまって寝ていたから、お腹がいたいのかと思って……」

気遣うような声なんて、初めてかけられた。
それでも、

「あなたには関係のないことだ」

自分でもびっくりするほど、冷たい声だった。

だって彼女は、この瞳を知らない。だから、優しくするのだから。

「じゃあ、保護者の方を呼んでくるわ。どんな方かしら？」

「保護者などいませんよ。体調も良いです。早く消えてくれませんか」

これだけ暴言を吐いているのに、立ち去る気配も、怒った様子もない。

彼女は恐らく人買いではないのだろう。

「そうなの……」

しかし、めんどくさい人種であることには変わらない。どうやら僕に同情しているらしい。

化け物だと知らずに、可哀想なひとだ。

「じゃあ、」

どうするつもりだ？

売るか、飼うか、手に負えないと逃げるか……

「うちの子にならない？」

「……は？」

思わず、くるりと後ろを向いてしまった。

「っ！！」

そして、あまりの美しさに絶句した。

処女雪のように穢れを知らない、滑らかな肌。

大きな瞳は、宝石のごとく輝く翡翠。

波打つ豊かな、はちみつ色の髪。

なによりも……

「なぜ、」

見えてるはずだ。この瞳が、いま。
どうして顔色ひとつ変えない！！

「あのね、怪しい人じゃないわよ？わたし、近くで孤児院をやっているの。そのマザーよ。だから、遠慮せずにいらっしやい」

まだ出来たばかりだから、いろいろ手伝ってくれと嬉しいわ、と彼女は笑った。

「……そうじゃない。見えてるんだらう？この赤い瞳が！」

この暗黒時代、子供が捨てられることなんて日常茶飯事だ。でも、僕のような化け物は、いつ生まれても捨てられる。

拾うなんてとんだ酔狂者だ。

「ひとみ？」

血のように赤い瞳だ。まるで、魔物のような狂気を感じると村人に囁かれていた。

「っ、あなた…！」

息をのむ音が聞こえた。

そう、それこそが普通の人間なんだ。甘い善意なんて吐き気がするよ。

「素敵ねえ…リコリスの色だわ」

ふわりと甘く微笑んだ。

たおやかな侵蝕（後書き）

長いのでここで切ります。

悲しいんじゃないくて、
疲れただけ（前書き）

進展遅くてすみません。

悲しいんじゃないくて、疲れただけ

「……嘘だ」

こぼれた声は、情けないほど震えていた。

「どうして？ 同じ赤よ？」

にこにこと笑うこの美しい女を、ぐちゃぐちゃにしてやりたい。
グッと拳を握って、耐える。

「……違う。この赤は、血の色だ。この色のせいで母は狂い、僕は捨てられた」

からだを起こして、彼女を正面から見上げた。

「こんな化け物まで欲しいなんて。あなたの施設は、見世物小屋なの？」

蔑んだような目を向ければ、彼女は少し、寂しそうな顔をした。

「リコリスでも、血の色でも良いの。ただ、わたし、あなたの赤が好きよ。だから大好きなリコリスの花と一緒にしたの」

「ああ、それはおめでたい考えだ。どうぞお好きに。でも、これだけは変わらない」

なんの苦勞も知らない美しいひと。

「この瞳が周りを、僕を、不幸にした。僕は嫌いだよ。この赤が別に悲しいわけでもない。ただ、疲れてしまった。」

「救いの手はいらないよ」

僕の望みはただひとつ。

この瞳を、永遠に閉ざすことだ。

「僕を哀れだと思ふのなら、殺してくれない？」

天使のような美しいひと。

その穢れを知らない白魚のような手が、僕の首を絞めてくれたら…。

どんなに素晴らしいだろうか。

「……」

彼女は、真っ直ぐ僕を見つめた。

そして静かに手を伸ばした。

「死にたいのね？」

柔らかな手が、僕の頬を優しく撫でる。

「うん…、疲れたんだ。悲しみも絶望も孤独も、なにも感じたくない」

すると、彼女は鞘から、そっと剣を取り出した。女性がよく持つ護身用の小さな剣だ。

「……」

「最後に言いたいことはある？」

「なにも」

異変に気づいた町の何人かが、チラチラとこちらを見ている。でも、誰も止めない。人間なんてそんなものだ。

目の前の彼女は、どうやら違うみたいだが。

「そう、じゃあ……」

こんな化け物の茶番に、最後まで付き合ってくれた。

「さようなら」

彼女が剣を振り上げた。

しかし、それが降りおろされる直前。

「っ！」

首に、強い衝撃を感じた。

「おやすみなさい」

彼女の甘い微笑みを最後に、僕の意識は沈んだ。

悲しいんじゃない、**疲れただけ（後書き）**

次回は忠犬デヴィットも。お疲れ様です騎士生活。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3708w/>

最強聖母伝説

2011年11月27日09時52分発行